

説林

動物愛憐と教育 (承前)

本田増次郎



次には動物哀憐の教育的價値に付て申しませう  
まづひどい例ではあります、殺人犯の多數は屠  
牛者とか獵師とかいふやうな殘酷な業に従事する  
者より出づるそう、動物保護の行はるゝ國ほど  
殺人犯は少ないといふ事です。凡て吾人は皆教育  
者たるべきもので、只に人に向て教育者であるべ  
きのみならず、又動植物に對してもひとしく教育

者でなければなりません。西洋人が犬猫を教育す  
る注意、忍耐、苦心は丁度人を教育するやうで、  
まるで下等動物とせず、人間のやうに取扱ふので  
す。それで動物も亦よく人語を解しまして、人情  
に通じ人に益し人の友となりまして互に精神的感  
化を及ぼして居ります。こういう風に動物を取扱  
ふ態度で盲啞や子供を取扱つたならば、吾人の得  
る所はどんなにか多いでせう。子供は殆ど下等動  
物に近いほど理性の發達して居らぬものですか  
う、之を取扱てやるのには大人はよほど注意して  
やる志要があるのです。

大人となりてから婦人や薄命者に對する心やさ  
しい態度は、まづ動物を憐む事から教へはじむる  
がよろしい。今爰に一の下等動物がありましたな  
らば、それに只臆を教ふるばかりでなく一種の徳

性を養ふ事、衛生上の注意を與ふべき事柄は随分澤山あります。それに日本では家畜に對しては随分不注意で、之より受くべき當然の効果を十分受くる事ができないのです。そこで一家に養うて居る犬猫雞などを子供に分擔させて、吾物として責任を以て飼養教育させるといふ事は大變有益で、其やさしい注意は移して兄弟他人に、又男は女に對してあらはす事になりませう。しかるに下等動物には少しも注意せずに、卒然人間に對してこそせよ、わいせよと言ふのはそも／＼無理な話なんです。

次に、動物取扱問題に對する歴史はどうであるかと申しますと、まづ佛教は動物愛憐に付て最も力を盡すべき地位にありまして、動物愛憐に關する歴史、文學、逸事等多くありませう。儒教も亦

仁を禽獸草木に及ぼすべきを説いて居ります。一體此動物愛憐といふ事が教育上果して肝要なものであるといつたしましたならば、日本でもいろ／＼其思想の變遷及事實を調査して教育の材料とすべきであります。今歐洲に於る動物道德の變遷を一言いたしますが、ギリシア時代には動物の知恵に由りて藥を得たといふやうな傳説、又は動物を愛憐すへしと説きし學者もあり、又雀一羽を虚待した爲に死刑に處せられるなど律令のきびしいのもあります。次にローマ時代には尙武の氣象養成の爲に、獸類を相たゝかはせて見物する事がありまして、大に愛憐の心を殺ぎました。それにも拘らず大體に就ては愛憐の心の表はれたる文學、哲學說及佛教に似た輪廻説もあり、又ブルターク出で徳義上動物愛憐の必要な事を説きました。次に

耶蘇舊教の時代には動物虐待とがめぬばかりでなく、少しも愛憐すべきことを教へず、靈魂あるは人間のみと信じ人間の救済のみに重きを置きし爲に、動物を愛憐するまでには至らなかつた。處か舊教では隱者修道者とも言はうか、山又は沙漠に入りて人間と交際を絶り讀經冥想を事とする僧侶があつて、こんな人は自然外に相手がなく動物のみと交はつた。それで之等の人にはいろいろ動物に關する傳説がありまして、聖コルマンは牝鶏とはつかねずみと蠅とを友とした、鶏は時計の代りになり、はつかねずみは眠くなつた時に耳を引ばる、蠅は本の讀みかけの處にとまつてしをりの代になつたなど、いふ傳説があるのです。そうしてこんな傳説は幾百もありますが、今でこそ妄誕と思ひますが當時の人は此傳説を信じて居り

ましたから、間接に動物哀憐の思想を導きました別に宗教の教義として動物哀憐を説いたのではありませぬ。求に新教時代となり十八世紀に至りて初めて此動物哀憐の思想が起りました。イタリーとスペインハ今も舊教が行はれて居りますから、動物哀憐はあまり行はれませんで闘牛など殘酷な事が盛ですが、新教起りて輓近百年内に此思想は大に盛になりて、今日歐米にては其爲の法令、會合、出版物及事業など随分澤山あります。

まづ會合では、生体解剖に反對する會、冬鳥に食物を與へんとする子供の會、廣く動物を保護する事を約した會、などがありまして、米國のごときは此種の會が二十計もあります。出版物で名高いのはブラック、ピューチャーといつて馬の自傳を書いたもの、ピューチャージョーといふ犬の自傳

ポイセス、フオア、ゼ、スピーチレスとて古來動物に關する詩文を拔萃せるもの、ワイルド、アニマルス、アイ、ハブ、ノーンとて野獸に付ての實見した觀察談を動物自身の立場より書いたもの、其他雜誌も随分澤山あります。事業としては迷子となつて居る犬猫を拾ひ上げて養育する事、病犬猫を世話する事、途中になやめる牛馬を助ける事即ち言はゞ動物の養育院慈善病院のやうなものが澤山あります。

今度は有名な人の動物哀憐に對する訓言を少し申しませう。

古代の英國著述家の詞に「已ニ優リテ他ヲ愛スルモノ此地上犬ヨリ外ニナシ」とあります。

ポーブは「歴史ハ友人間ノ忠實ヨリモ犬ノ忠實ナル例證ニ富ムヲ多シ」と申して居ます。

獨逸のグイツシャー（審美學者）は社交場裏に在る毎に「唯心ニ願フ所ハ一頭ノ犬ノ在ランヲ也」と云ひました。

バイロンの犬の碑文には

「茲ニ其遺骸ヲ留ムルハ、

美貌ヲ具ヘテ之ニ誇ル心ナク、カアリテ他ヲ凌ガズ、

勇アリテ猛カラズ、人間ノ美德ヲ悉ク具ヘテ人間ノ不徳ナキモノ也」とあります。

ツルゲネフ（魯國ノ文豪）の書物にはこんな文句がであります。

「吾ガ犬ト吾ト兩個室中ニ坐セリ、戶外ニハ暴風吹キスサメリ、

犬ハ吾ニスリヨリテ眞一文字ニ吾兩眼ヲ打守ル吾モ亦眞一文字ニ彼ノ兩眼ヲ打見ヤル、

其狀恰モ何事カ吾ニ談ラントスルモノ、如シ  
 彼ハ、嗚者ナリ、

言語ヲ有セズ、又彼自身ヲ解セズ、サレド吾ハ  
 彼ヲ解ス、

吾ハカク解セリ、彼ト吾ト此瞬間同一ノ感情ニ  
 支配セラレ、兩者ノ間聊カノ相違ナシ、吾等兩

個ハ同類ナリ、同一ノ欲其胸中ニ燃エ輝ケリ、  
 死ハ其ガ廣キ冷タキ濡レタル翼ヲ以テ襲ヒ來ル

— 萬物はニ於テ終ヲ告グ、  
 其時吾等兩個ガ胸中ニ燃エタル欲ヲ區別シ得ル

モノハ誰ゾ、  
 否ナ〜カク互ニ目ヲ以テ相談ルモノハ獸ト人

トニアラズ、  
 カク互ニ見カハスニ對ノ眼ハ一樣ニ造ラル、

斯ノ人ノ眼、斯ノ犬ノ眼、共ニ明白ニ語ル所ハ

相互ノ寵愛ヲ切ニ求ムルノ情ナリ」

次には動物に關するお話しを少し致しませう。

ホイットフィールド教授の説に由りますと、鰻は  
 人間と同じ割合で鋭敏な覺覺、頭腦、神經系統を  
 もつて居るといふ事です、して見ると生きたるま  
 ゝ煮たり、焙つたり、樽詰にして幾日も打捨て置  
 いたりするのは實に殘酷だといはねばなりません。

(完)

